th

ANNIVERSARY

特定非営利活動法人

全国邦楽合奏協会

10周年記念誌

「第４回全国邦楽合奏フェスティバル」関連演奏会「邦楽ルネッサンス『洋楽と邦楽との止揚』でのプロ・アマ合同曲『巨火（三木稔作曲）』の演奏」（18年12月　徳島県徳島市）

目　次

ご祝辞・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

徳島県知事　後藤田正純
人間国宝　今藤政太郎
（公財）日本伝統文化振興財団顧問　藤本　　草
指揮者　稲田　　康
箏曲演奏家　石垣　清美

理事長挨拶　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
１０年のあゆみ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
創立１０周年記念座談会・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
海外公演 記録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
オンライン活用の成果と展望・・・・・・・・・・・・・・・・18
担当者の声・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
フォト・ギャラリー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

祝　　辞

徳島県知事　　後藤田 正純

特定非営利活動法人全国邦楽合奏協会が、節目となる設立１０周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げますとともに、記念誌が発行されますことをお慶び申し上げます。

貴協会におかれましては、2011年に流派を超えた全国組織として徳島で初めて設立され、その後、様々な活動を通じて伝統楽器の素晴らしさや合奏の楽しさを国内外に広く発信いただき、邦楽の普及・発展に意欲的に取り組んでこられました。設立の翌年に「第27回国民文化祭とくしま2012」において盛大に開催された「全国邦楽合奏フェスティバル～『全国邦楽合奏協会』誕生公演～」をはじめとして、その後も継続して全国各地で「邦楽合奏フェスティバル」を開催され、多くの人々に素晴らしい音楽を届けることで、邦楽の振興にご貢献いただいております。

また、中国や韓国で開催されたコンサートにおいて演奏を披露するなど、日本の伝統文化である邦楽を架け橋として、国際交流という大きな役割を果たしていただいておりますことに、深く敬意を表する次第であります。

設立からこれまでの間、演奏活動をはじめ多方面で活動されており、その一つである「邦楽コンクール」の開催は、邦楽を演奏される皆様が日々の研鑽の成果を発揮する貴重な場であるとともに、今後、さらに演奏技術を磨くため、心機一転し稽古に邁進するきっかけを与えてくれる機会でもあります。また、親子での楽器体験やワークショップ、徳島県内においても小学校を対象とした出前授業を数多く実施されるなど、次代を担う子どもたちが本物の音楽に触れ、邦楽合奏を身近に感じる機会を創出し、文化芸術の担い手の育成に寄与していただいております。さらに、コロナ禍であった２０２１年には、名曲「夕顔」のオンライン講習会を行うなど、芸術の灯を絶やさないように活動を続けてこられました。このような一つ一つの活動が点から面へと広がり、世界に誇るべき伝統文化である邦楽が次世代へと確実に受け継がれていくものと、大いに期待申し上げます。

結びに、特定非営利活動法人全国邦楽合奏協会の更なるご発展と、皆様のますますのご健勝、ご多幸を心より祈念申し上げ、お祝いの言葉と致します。

お祝いのことば

人間国宝　　今藤　政太郎

全国邦楽合奏協会創立10周年おめでとうございます。

はじめて藤本さんの全奏協にお邪魔したのは、徳島大会の時でした。それから金沢、洗足学園音楽大学での大会にも参加させていただきましたが、おそらく国内で一番大きなこのアマチュアの邦楽フェスティバルのプログラムの充実ぶりや、一生懸命に丁寧に運営されているスタッフの方の御姿に、大いに感銘を受けたことを覚えています。

洗足学園では、演奏のコンクールなど華やかな催しがたくさんありました。アマチュアとはいえ鍛えられた技術で、プロの舌を巻かせるくらいの演奏もありました。そのとき、アマチュアとプロの違いは何だろうかと思いました。単に演奏でお金を貰うかどうかの差ではないかとさえ思いました。なかには、アマチュアならではの発想で、プロも学びたい様式の転換がありましたし、プロもアマチュアに学ばなければならないことが多くあると、つくづく思いました。

もちろんプロの演奏にはプロならではというものもありました。しかしプロの世界ではなかなか正面切っては取り上げにくい、家元制度について意見交換をする場もありました。同好会とははるかに違う、突っ込んだ話し合いもありました。全体を通して、とても楽しく、プロとアマの交流がいかに大切か、それを強く思いました。

細かいことを言えば、プロとアマが合奏できるような企画が少なかったようにも思います。そんなことを思いながら、次に参加する機会を楽しみにしています。

祝　　辞

公益財団法人日本伝統文化振興財団顧問
藤本　草

「世の中に無いもの」を創り出すこと。
その本当の難しさは、出来てしまった後からは想像がつきません。
もしも2023年の現在まで全奏協が存在していなかったら、このジャンルに携わる全国の方々の活動が一体どれほど停滞低下していただろうと考える時、全奏協が目指した邦楽の新しい在り方、この10年間に積み重ねてきた実績の大きさに目を見張る思いです。
それは2010年より少し前の頃だったでしょうか。
新しい団体の設立に向けた何回目かの会合で、田中隆文さんは珍しくやや声を荒げ、「君は」と少し突き放したように聞こえる呼び方で、藤本玲さんに様々な問題点を指摘されていました。前類のない伝統芸能月刊誌「邦楽ジャーナル」を創刊した田中さんには、新しく何かを始めることのハードルの高さ、言うに言われぬ批判、そして一番恩恵を受けるであろう当該ジャンルの演奏家からの予想外の無関心などを、それこそ「とことん知っておられた」のだろうと思います。そして始めるからには絶対失敗出来ないこと、続けて行くには事前の徹底的なケーススタディなくしてはならないことも。
一見無理そうでいて実はぎりぎり実現可能なアイディアに向かって、まず先に走り始めてしまう藤本玲さん（我々が見えない何かに気付き、その本質を掬い上げる力が玲さんにあります）と、アドバイザーの範疇を自ら望んで超え、我がこととして全奏協の設立に親身な献身を厭わなかった田中隆文さん。私は、このふたりのうちどちらかが欠けていても現在の全奏協はなかったと思っています。そしてこの新たな活動に共感し、推進役となられたすべての方々に心から敬意を表したいと思います。
創立10周年を迎えた全奏協は、今後も邦楽に携わる全国の方々のハブとなり続けるとともに、邦楽に接することの少ない聴衆＝受容者を増やし、困難な時代を迎えている伝統芸能の発展にさらに寄与して行かれることを心から祈念しています。

10周年記念祝辞

指揮者　稲田　康

特定非営利活動法人全国邦楽合奏協会発足10周年、誠におめでとうございます。私も当初より顧問としてまた指揮者として、この素晴らしい団体を支える一員として関わり、応援して参りました。この節目の年に心からの祝福を申し上げます。

私は徳島、釜山、金沢など、多くの会場での素晴らしいイベントに参加し、心豊かな合奏を楽しむ機会を得ることができました。皆さんの熱意に溢れた姿勢は、合奏の中だけでなく、休憩時間や演奏後にも音楽に対する深い質問をされる姿勢からも伺えました。このような熱心なメンバーと共に過ごす時間は、私にとって大きな喜びとなりました。

全国邦楽合奏協会が存在するおかげで、私たちはこれらの素晴らしい瞬間を共有できる場を持つことができました。この団体の存在がなければ、私はこんなにも多様な背景を持つ人々と邦楽の響きを共有することはありませんでした。そのことを心から感謝しております。

近年では、2002年に学校教育に邦楽が取り入れられるなど、着実に進展が見られます。しかし、まだまだ社会全体からみると邦楽は特殊なジャンルと言えるかもしれません。ですが、全国邦楽合奏協会は、その境界を越え、多くの方々が邦楽の素晴らしさを知り、愛するきっかけとなってきました。これからも、この協会が邦楽発展の起爆剤として、日本の伝統音楽がより広く、深く浸透するための大切な役割を果たすことを願っています。

心からの感謝と共に、これからも全国邦楽合奏協会の益々の発展とご健勝をお祈り申し上げます。

お祝いのことば

箏曲演奏家　石垣　清美

全国邦楽合奏協会発足10周年、そして10年誌の発行、おめでとうございます。

まさしく今の時代の技術を使って立ち上げた協会だと思います。

徳島発信で、広島、金沢他全国各地の方々がリモートで会議を進めて、演奏会、講習会、コンクール他いろいろな企画をされてこられたこと、すばらしいです。

少し前までは、必ずどこかに集合し進めて来たことを、遠くに居ながらにして、事が進んでいく。いまだに時代の流れについていけない私には夢のような世界ですが、すでに十年も前から始まっていたのですね。

お箏、尺八他邦楽器が好きで、近くの仲間の合奏を楽しんでこられた方達が、それには満足せず、もっといろんな人達と交流を深めて、技術、知識を情報交換するなかで、新しい世界が生まれるのでしょう。

邦楽の衰退を案じるだけでは、何も生まれません。

若い世代、特に子供達に邦楽の楽しみを味わってもらえれば、という思いは強いです。

今後、大変なことも多いと思いますが、邦楽の発展のため、そして日本のすばらしい音楽を世界中に発信するために、ますます活躍、活動の場を広げていただきたいと熱望します。可能な限りのお手伝いは、いつでもさせていただきたいと思っています。

お願いの文章になってしまいましたが、エールを送り、お祝いの言葉とさせていただきます。

ご挨拶
～全国邦楽合奏協会
立ち上げを振り返り～

特定非営利活動法人全国邦楽合奏協会
理事長　藤本　玲

この度、NPO法人全国邦楽合奏協会が創立10周年を迎えることとなりました。これもひとえにご支援くださった関係各位の皆様のお陰と心よりお礼申し上げます。

さて、私は長年学校の邦楽部活動の指導にかかわってきました。それが全国邦楽合奏協会（全奏協）立ち上げのきっかけです。部員の卒業後の受け皿を作らなくてはいけないと、1998年、徳島邦楽集団を立ち上げました。活動するうちに、大学進学や就職で皆が県外に行くという課題が発生しました。「それなら全国どこででも自由に邦楽を楽しめる場所があればよいのだ」と全国組織を作ることを思いつきました。

私の背中を押してくださったのは徳島出身の作曲家・故三木稔氏でした。「全国にはアマチュア邦楽グループがたくさんあるのにそれをつなぐ組織がありません。発展のためにはそれが必要です」という力強いお言葉をいただきました。

2007年「とくしま国民文化祭」で、私が指導者として関わっていた城東高校邦楽部の部員たちと「日本の音フェスティバル」（JASRAC主催）の学園版をやりたいという話が持ち上がりました。その時、それを制作していた東京の邦楽ジャーナルを訪ね、代表の田中隆文さんに夢を語りました。田中さんは初対面にもかかわらず「アマチュアの組織を作る事はすばらしい」と全奏協立ち上げの同志となってくれました。

当時の私はパソコンや組織作りの知識もなく、ただ夢を語る熱い「おばさん」でした。そんな私にNPO法人の組織作りを定款から教えてくださったのがオーラJの事務局長で尺八奏者の森佳久山さんでした。全奏協創立に欠かせない事務局の石井恭子さんが加わり、立ち上げのお膳立てが整いました。

田中さんの紹介でたくさんの邦楽仲間に出会うきっかけができました。アマチュア合奏団出身の演奏家・石川憲弘さんからはたくさんのアドバイスを頂きました。広島の山本観山さん、大阪の麻植武志さん、東京の立花茂生さん、神戸の名村茂代さん、大阪の福井伸二郎さん、和歌山の坂本雅広さん、地元徳島からは英崇夫さん、内田道子さん、山上明山さん達が共感してくださり立ち上げのメンバーとなりました。立ち上げ当時、名もない全奏協に顧問としてお名前を連ねてくださった多くの著名な指揮者・作曲家・演奏家の皆様には全奏協に力と信頼を与えてくださいました。

大阪で開催する「全奏協邦楽コンクール」では、麻植さんを筆頭に奈良の故竹村さつきさん、谷垣千鶴さん、和楽器オーケストラ邦楽合奏団「鼎」の有志の方にお世話になりました。その後、高知の高橋哲也さん、福岡の佐藤法子さん、金沢の釣谷真弓さん、仙台の関野由美子さん、埼玉の中川雅玲さんとどんどん仲間が増えていきます。地元では事務や会計を山上朋代さん、平岡香織さん、山本真佐子さんが手伝ってくれます。今の全奏協を支えているメンバーです。この巡り合いは運命だったのかもしれません。

2012年、二度目となる「とくしま国民文化祭」では邦楽界第一線でご活躍の多くの皆様の協力を頂き「全国邦楽合奏フェスティバル誕生公演」を開催できました。ご縁とチャンスに恵まれました。感謝しかありません。

邦楽合奏を楽しみ、愛好して、活動を共にしてくださっている会員の皆様にはこの場をお借りして厚く御礼を申し上げます。次の10年は課題をクリアして、若い世代に交代できるよう頑張る所存です。引き続きご協力のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

全国邦楽合奏協会10年のあゆみ

Ⅰ　発足と草創期

2011年（H.23）
４月　設立準備会発足
７月　大阪にて設立総会、東京説明会開催
（大阪市・新大阪丸ビル本館・中央区立産業会館）

初の助成事業（11年11月高知県高知市）

2011年（H.23）
11月４日　**特定非営利活動法人全国邦楽合奏協会設立認証される。**

2011年（H.23）11月
初活動『はじめて弾く琴～さくら～』箏体験教室（助成事業）（高知市春野町南ヶ丘コミュニティーセンター）

初のコンクール　授賞式
（12年7月大阪市阿倍野区）

2012年（H.24）1月・２月
関東地区と関西地区で講習・交流会実施（すみだ産業会館・大阪市立中央会館ほか）

2012年（H.24）3月
会報　「全奏協通信」　作成　以降毎年刊行（2022年度第12号）

2012年（H.24）6月10日
初の総会・意見交換交流会　実施　（大阪市・田波楽器店）

全国邦楽合奏協会誕生記念公演開催（12年9月徳島県阿南市）

2012年（H.24）7月14日
第１回シニア邦楽コンクール実施　第１回コンクール以降名称を変えて８回（2023年）まで実施

2012年（H.24）9月
文化庁主催「第27回国民文化祭・とくしま2012」において「邦楽への招待　和の元気！　未来邦楽」をテーマに、徳島県・阿南市・徳島県三曲協会・阿南市文化会館と共催で、**第１回全国邦楽合奏フェスティバル「全国邦楽合奏協会誕生公演」**（徳島県阿南市文化会館夢ホール）を開催。

第2回全国邦楽合奏フェスの体験コーナーで三味線制作実演（14年２月東京三鷹市）

以降、全国邦楽合奏協会が「全国邦楽合奏フェスティバル」を引き継ぎ、全国各地で開催。

以降
2014年（H.26）　2月　第2回（三鷹市公会堂）
2015年（H.27）　7月　第3回（石川県立音楽堂）
2016年（H.28）　12月　第4回（徳島市あわぎんホール）
2018年（H.30）　9月　第5回（川崎市洗足学園音楽大学）
2021年（R. 3）　11月　第6回（田辺市紀南文化会館）　　にて、開催

第3回「全国邦楽合奏フェスティバル」での演奏。（15年7月　石川県金沢市　石川県立音楽堂）

同左での演奏。ラジオ体操のメロディーを尺八で演奏。それに合わせて観客もラジオ体操でストレッチ（15年7月　石川県金沢市　石川県立音楽堂）

第4回「全国邦楽合奏フェスティバルin徳島」で＜～あわ邦楽サミット～徹底討論！邦楽未来への行動＞シンポジウム（16年12月徳島県神山町）

同左にて「シルクロードにみる和楽器のルーツ」をテーマに講演する釣谷真弓理事＝右 と韓国の民族楽器コムンゴを掲げる英崇夫理事（16年12月徳島県神山町）

第５回「全国邦楽合奏フェスティバル」で。民族楽器の展示　（18年8月　川崎市　洗足学園音楽大学）

同左にて。子どもの箏体験（18年8月　川崎市洗足学園音楽大学）

「第36回国民文化祭　第６回全国邦楽合奏フェスティバルin田辺」で。虚無僧発祥の興国寺（和歌山県由良町）に伝わる本曲の演奏（21年11月　和歌山県田辺市紀南文化会館）

同左の一環行事として開催された「国際尺八コンクール」での表彰式後の記念撮影　（21年11月和歌山県田辺市紀南文化会館）

Ⅱ　活動が海外へも発展

2013年（H.25年）10月　**第1回日韓伝統音楽会議**
（韓国・釜山市オウルリム練習会館）

2014年（H.26）5月　セウォル号哀悼コンサート
（オウルリム共催）（韓国・釜山市）

2014年（H.26）8月　和楽器豪華絢爛美しい和の調べ演奏・体験会（中国・上海市）

2015年（H.27）5月　**韓日伝統芸術交流音楽祭**
（日韓国交正常化50周年記念）
（韓国・釜山市）

2015年（H.27）10月　蘇州・上海邦楽公演
（こうべ邦楽ワークショップとの共催）
（中国・蘇州市、上海市）

2017年（H.29）5月　**日中国交正常化45周年記念大連アカシヤ祭ジャパンデイ**
（中国・大連市）

2018年（H.30）2月
「全国をつなぐ邦楽の輪・和・倭コンサート」賛助出演（石川県立音楽堂邦楽ホール）

2019年（R.1）11月
釜山日本人学校邦楽体験授業実施
（韓国・釜山市）

セウォル号哀悼コンサート
（14年５月韓国・釜山市）

在上海日本総領事館アジア文化センターでの演奏（指揮　山上明山）と演奏体験（写真上）
（15年10月　中国・上海市）

日韓国交正常化50周年記念事業「韓日伝統芸術交流音楽祭」伝統楽器演奏体験交流（写真上）と意見交換会（いずれも15年５月　国立釜山国楽院＝韓国・釜山市）

韓国海洋大学校合唱団“SeaCross”および韓国国楽研究会「オウルリム」との合同演奏会（指揮　稲田康＝ 写真上）と懇親会（15年５月韓国・釜山市）

日韓国交正常化50周年記念事業「韓日伝統芸術交流音楽祭」国立釜山国楽院合奏団との合同演奏　指揮　稲田康（１５年５月国立釜山国楽院＝韓国・釜山市）

大連演奏交流会（16年3月中国・大連市）

日中国交正常化45周年記念大連アカシヤ祭ジャパンディに参加（17年5月中国・大連市）

釜山日本人学校で和楽器体験授業（左）と釜山市役所訪問（19年11月韓国・釜山市）

Ⅲ　コロナ禍を乗りこえオンライン活用へ

2020年（R.２）より
コロナ禍のためZoom(※１）による理事会、交流会、合奏（実証実験）を毎月実施

2021年（R.３）１月
「SYNCROOM（※２）で邦楽合奏を始めよう」Zoomにて実施　その後実証実験を行う

６月「今邦楽ができること　夏の終わり創作リレー」YouTube（※３）配信

７～9月「《夕顔》の三弦・箏・尺八と邦楽発声法」Zoomによるリモート講習会

2022年（R.４）10月
「長澤作品で学ぶ音楽講座」Zoomにて実施

10月　「ワールドオンラインディスカッション」実施

2024年（R.６）７月
「リアル＆オンラインハイブリッド講習会縦譜を作ろう」実施

この間、徳島市ほか全国各地で学校公演、ワークショップ、邦楽体験教室を開催し、コロナ禍以降はオンラインも駆使して邦楽の普及に尽力する。また関東、関西などで外部講師を招いて講習会を実施するなど会員自身の技術向上、研鑽に努め、邦楽界のネットワークを広げ邦楽人口を増やすために活動をおこなっている。

※１　ZoomはZoom Video Communications, Inc.の登録商標
※２　SYNCROOMはYAMAHA㈱の登録商標
※３　YouTubeはグーグル インコーポレイテッドの登録商標

リモート合奏実証実験の成果を第６回「全国邦楽合奏フェスティバルin田辺」で披露

「夕顔」リモート講習会

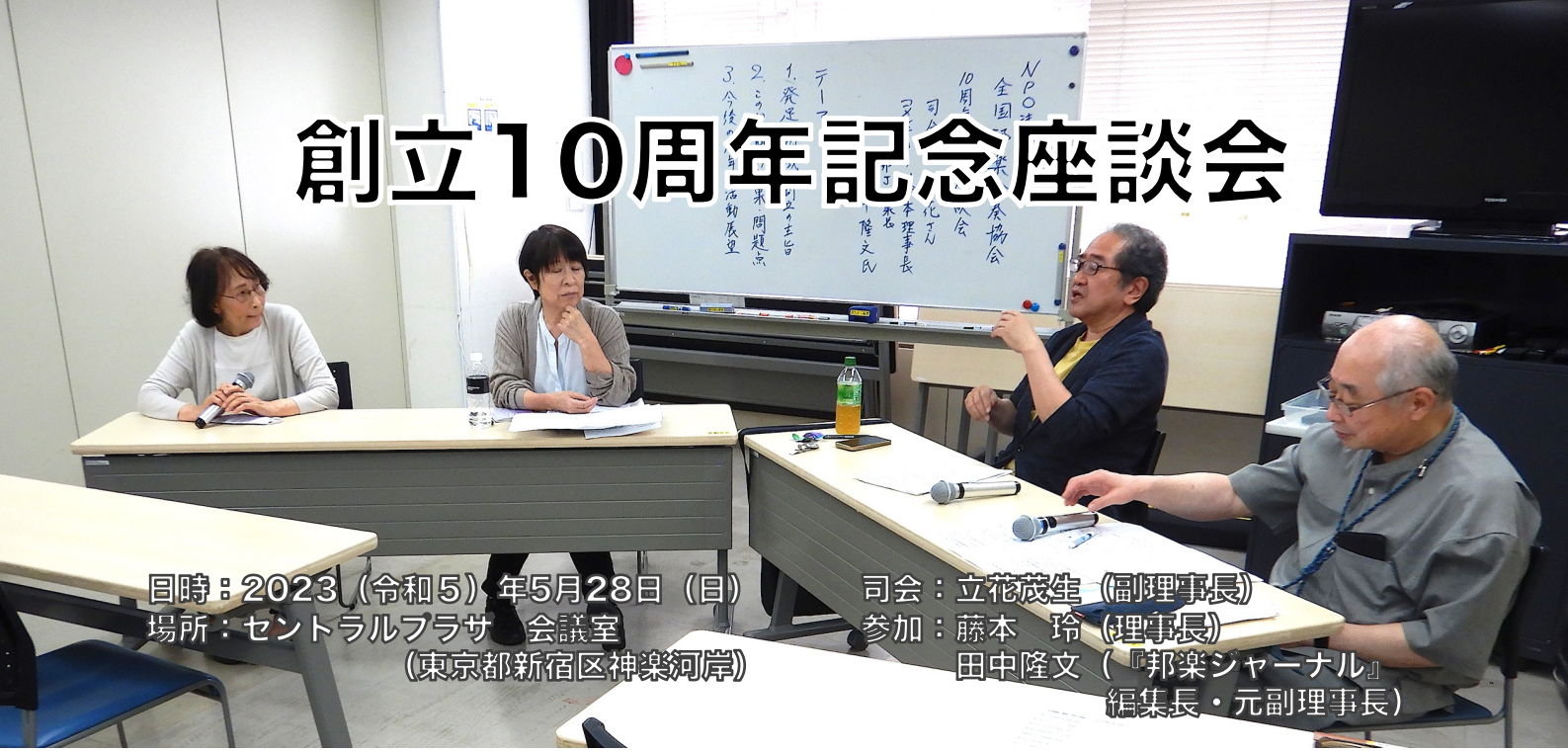
「夕顔」リモート講習会の成果をを第６回「全国邦楽合奏フェスティバルin田辺」で披露

ワールドオンラインディスカッションのスタッフ　（22年10月）

発足時の役員
理事長：藤本　玲　　副理事長　：森　博明
理　事：田中　隆文　山本　傳　麻植武志　立花茂生　英　崇夫　山上具視
　　福井伸二郎　内田道子　名村茂代　坂本雅広
監　事：宮本　晴義

顧　問：理事長の諮問に応じて助言を行い、理事会の要請がある時はこれに出席して意見を述べることができる。（一部略　「顧問に関する規定」より）
　　石川憲弘　稲田　康　黒河内茂　坂田誠山　清水義矩　高橋明邦
　　田村拓男　藤本　草　星田一山　三木　稔　三塚幸彦

創立10周年記念座談会



日時：2023（令和５）年5月28日（日）
場所：セントラルプラザ　会議室
（東京都新宿区神楽河岸）

司会：立花茂生（副理事長）
参加：藤本　玲（理事長）
田中隆文（『邦楽ジャーナル』編集長・元副理事長）

令和５年度総会終了後、当協会創立10周年記念のイベントとして座談会を開催し、創立当時からこれまでの経緯を振り返った。協会の理事の顔ぶれも創立の時から半数近くが変わり、当時のことを知る人も少なくなっていることから、今一度発足された時の話を伺い、将来に伝えていくことが必要という意見からの企画である。

司会：今日はお時間をとって頂きありがとうございます。2022年に創立から10周年を迎えたことにつき、今日は次の３つのテーマを中心にお話を伺いたいと思います。

1　発足の動機、創立の主旨
2　この10年の活動の成果と問題点
3　今後10年の活動の展望

まず、最初のテーマについて、藤本さんにお話を伺います。

藤本：この団体を立ち上げた理由は一つです。30年近く学校の邦楽指導に関わってきて、子供たちが卒業後にも邦楽を楽しめる場を作りたかったということです。卒業したら邦楽と縁が切れるのではなく、つながりを持ちたいと思いました。

司会：発足にあたって多くの方に相談しながら実現にむけて動かれたわけですが、田中さんはその思いを聞いて、どんなアドバイスをされたのですか？

田中：2008年に石井（恭子）さん（現事務局）と二人に初めて話を聞いたんです。

1980年代に日本音楽集団のメンバーが「全国の合奏団集まれ」と声を上げて以来、アマチュア集団のつながりがなかった。

1990年前後に『邦楽ジャーナル』で邦楽グループの特集を組んだ時にわかったのですが、71年か72年に日本音楽集団が軽井沢で合宿をした時の参加者が全国に散らばって、たくさんのアマチュア合奏団が生まれていました。それに邦楽バンドも加えると全国に60くらい、そのうち関東に30くらいのグループがありました。それらをつなげると意義があると思ったんだよね。

司会　立花茂生　副理事長

司会：発足に向けての仕事はほとんど森（佳久山）さんが一人でやって、定款作成を担当、総括的に田中さんがまとめられていましたね。

田中：2008年から動き出し、翌年「和ネット」という団体を立ち上げたんだけど、色々あって一年半後にもっとしっかりした組織を作ろうということになったんです。

2011年の設立総会のあと、徳島県庁で記者会見を開きました。これは、マスコミの力を借りることでもあり、地方発信ということが重要な点だったので、徳島県が応援する立場を鮮明にしてくれたのも大きかったよね。

11月には確実な組織と運営を示すために、NPO法人化して、社会的な意味も大きくなったのです。

司会：「和ネット」の要素が全奏協の下地となっているということですね。
　当時、全国のアマチュアグループのつながりが必要と感じたのがきっかけとなったわけですが、設立にあたって苦労したこと、障害は何でしたか？

藤本：苦労した点は、自分自身が全国の邦楽家とはあまりつながりがなかったことです。田中さんに紹介して頂いて、色々な方に直にお会いして私がやりたいことを説明して回りました。関東は立花さん、関西では名村（茂代）さんなどですが、当時皆さんは合奏団として成熟されていて、「どこの田舎の馬の骨が…」と思われてなかなか理解し合えなかったです。

司会：NPO法人化というのは大事な項目であって、文化庁、自治体に認識してもらえたのですが、逆にそのために苦労もあったということですね。
　では第２のテーマの「この10年間の成果」についてお話下さい。

藤本：良かった点としては、まず全国でアマチュア活動をしていたグループと知り合えて、それらのスキルを知ることができたことです。また、当初は教え子のためという目的だったのが、一般の方、アマチュア合奏団全体を対象と考え方を変えていったのが、結果的に良かったと思います。

司会：初期の時代に手法として、田中さんがアドバイスされたことは何ですか？

田中：僕は何もやらなかった気がするけど…。
　2011年の「日本の音フェスティバル」（註１）のノウハウと経験と材料を利用したら盛り上がると思って、全奏協のイベントの時に提供しましたけどね。

藤本：田中さん、森さんお二人のおかげで今があると思います。

事務局 石井恭子氏

田中隆文　相談役

田中：いろいろケンカもしたよね(笑)

司会：半分以上は田中さんの人脈に頼ったわけですが、合奏団同士のつながりだけでなく、業者さんやプロの方など多くのつながりができたのも大きな収穫でしたね。

藤本：横に石井さんがいてくれて、とても助けてもらったからここまで来られたんです。

司会：影の立役者である石井さんも一言お願いします。

石井：私はただ横にいて右往左往しただけです(笑)。でも事務作業やメールの対応が大変でした。特に辛かったのは、三鷹市での全国フェスティバルの会場と駐車場探しでしたね。コンビニに頭を下げて回って、駐車場をお借りしたり…。

田中：助成金を得るための申請、報告書作りも大変です。

藤本：国文祭に際し、第12回の徳島国文祭では国や自治体からもかなりの助成を受けました。

田中：そうしてあれだけ大きな事業をやったことが、業者やプロにも注目されたんです。

藤本玲理事長

司会：私はフェスの実行委員長を２回やりましたが、経費に関しては理事長の担当なので、お金の心配をしなくてよかったです。藤本さんには大きなイベントをやる力があると思います。
　テーマとしては、それ以外にも海外公演、機関紙発行などの事業も充実しています。最近ではZoom使用の講習会なども成果をあげていますが、それについての思いは？

藤本：海外活動については、英（崇夫）さんが韓国海洋大学校のキム先生と親しくて、「日韓伝統音楽会議」を企画したら、それが大連（中国）公演につながりました。理事に様々なスキルを持つ人が集まっていることがありがたいですね。
　『全奏協通信』は高橋（哲也）さんが初回から（毎年発行）担当して頂いて感謝しています。
　Web関係では立花さんがいないとできないし、麻植（武志）さん担当のコンクールはコロナで３年休止だったのは残念でしたが、９回目を再開しました。出場することで励みになりますよね。

司会：難しい時代によくやってきたと思いますが、藤本さんがやりたいと思ってできなかったことはありますか？

藤本：一つあります。全国の支部を確立すれば、文化庁などの助成が全国規模になります。それは達成されていません。

司会：最も重要な最後のテーマ３ですが、邦楽界自体は苦しい状況です。今後の10年間どのようにいくのがよいのか、課題、期待など自由に意見をお聞かせ下さい。

藤本：一番問題なのは、事務仕事が多すぎることですが、実績は事務がきちんとしていたからこそだと思います。これからはコンサートのみでなく、有償で事務費をまかなえるようにしなくてはいけないと思っています。

司会：お金を得て何をしたいのですか？

藤本：全国的な組織を作ることです。中央集権でなく、ネットなどを利用して地域で活躍するための組織です。

司会：田中さんの将来のビジョンは？

田中：大きなことをアマチュア単位で実施していくこと。例えば国文祭などは隔年でもよいと思っています。
　でも本当に一番たいせつな交流ができているのか、ということです。
　コンサートのみではなく、末端の会員同士の活動が重要で、それが合同して一緒になることができるのではないか。そうなると会員同士の大きなエネルギーが生まれて全奏協が活性化します。

中川雅玲理事

名村茂代理事

司会：お二人の話を受けて他の方もご発言下さい。

名村（茂代）：これから一番重要なのは、有効なネット活用です。今の活用状態では若い人にアピールすることは難しいです。

中川（雅玲）：全奏協で曲を委嘱して、テーマ曲として全国で演奏してはどうでしょう。
　また、外国人の弟子が母国でいろいろ企画をしていますが、海外では日本文化に大変興味と感心をもって熱心に聴いてくれます。和服と同様に、絶やしてはいけないすばらしい文化ですよね。それが日本ではあまり興味をもたれていないので、日本人にも認識を改めてほしいです。海外公演はどこでもウェルカムなので積極的にやったほうがよいと思います。

田中：合宿をふくらませるというのはどう？
　毎夏、京都で行われている学フェス（註２）は、今年30年目で終わるんですが、学生たちが楽しみたいのは演奏だけではなく、夜の交流なんです。

司会：松尾（祐孝）先生（註３）にも、顧問就任も含めて一言お願いします。

松尾 祐孝　顧問

松尾：今年から顧問としてお仲間に入れて頂くことになりましたので、よろしくお願いします。初めての色々なお話を伺えて良かったです。第２回よりフェスに参加していますが、自分が所属する協会もＮＰＯ法人化したのですがとても大変だったので、ご苦労に敬意を表します。

フェスについては、コンサートのみでなく展示会、講習会などが組み合わされているあの規模のものはすごい。だけど、全国から集まった出演者は他の演奏を聴く余裕がなかったのが問題かな。前回の田辺市（註４）では、全国から集まったメンバーに指導して本番、というのは活気があってよかった、あの形はいいですね。

海外に出かけると、自分がアジア人、日本人だと感じるようになりました。そこで、西洋音楽のみで存在価値があるのかと・・。邦楽に注目するようになってわかったのは、邦楽器は世界中見わたしても、オケをバックにしてソロが成り立つ楽器の種類がこれだけ多いというのはすごいことなんです。東アジアの同属楽器の中で、形を変えず古いままで存在しています。最近は自分の半分ほどの作品（作曲）に邦楽器を使用しています。

そして財界、政界人にアピールする必要があります。また私が関わっている機関や国際イベントに参加して国際的交流の拠点としていければさらに発展するのではないでしょうか。国内のみを対象にしている必要はないですよ。少子化でもあり、外国に目を向けることが重要です。

司会：いくつかのアドバイス、問題点、今後のご提案が出ましたが、最も大きなキーワードは「交流」だと思います。さらにこれからの10年に向けて頑張っていきたいと思います。

これで座談会は終了させて頂きます。貴重なお話やご意見をありがとうございました。

註１・・2001～2010年にかけて東京・大阪を皮切りに全国各地で行われた邦楽の大規模総合イベント（JASRAC主催・邦楽ジャーナル制作）
註２・・全国学生邦楽フェスティバル
註３・・作曲家　洗足学園音楽大学教授
註４・・2021（令和３）年11月6、7日「紀の国和歌山文化祭」（和歌山県田辺市）にて「全国邦楽合奏フェスティバルin田辺」開催。

第５回全国邦楽合奏フェスティバル懇親会（18年9月　川崎市　洗足学園音楽大学）　撮影　関沼正幸

海外公演記録

英　崇夫（理事）

韓日伝統芸術交流音楽祭での韓国国楽院合奏団との日韓合同演奏「ソーラン節」
指揮：稲田康（2015年5月3日　韓国・釜山市　国立釜山国楽院）

○　2013年10月28日
第１回日韓伝統音楽交流会議

（釜山市・オウルリム練習会館）

【参加者】

日本側：

田中隆文（全奏協副理事長・『邦楽ジャーナル』編集長）

高橋久美子（作曲家）　全奏協会員10名

韓国側：

ソ・インファ（国立釜山国楽院院長）

パク・ミョンソプ（オウルリム会長）

ペク・キョジュン（作曲家）

ユ・チュノ（音楽雑誌『LARA』編集長）

キム・ユンヘ（韓国海洋大学校教授）他

國田達夫（在釜山日本総領事）

【意見交換】・両国の伝統音楽の底辺拡大のためのアマチュアへの展開や教授方法や教育システムについて情報交換。

・今後の交流として、両国の伝統楽器による交換演奏会、体験ワークショップ、創作活動を行う。

○　2014年５月３日
セウォル号犠牲者への追悼コンサート

（釜山市・プンリュゴテク）

本来５月４日に予定されていた「韓日伝統音楽祭」（国立釜山国楽院、全国邦楽合奏協会、釜山文化財団、在釜山日本国総領事館共催）が、４月16日のセウォル号沈没事件のため中止となり、その代わりに追悼コンサートを開催。それぞれの曲を演奏した。

○　2015年５月2日
交流演奏会

（釜山市・オウルリム練習会館）

翌日のイベントに先立ち、全国邦楽合奏協会、韓国国楽研究会オウルリム、韓国海洋大学校の合唱団Sea Cross合同の交流演奏会をもった。それぞれの団体が演奏のあと最後に３団体の合同演奏で《アリラン》《アメージンググレース》《さくらさくら》を合奏した。同所で交流会を開き、音楽による友好交流を深めた。

日韓両国伝統音楽に関するシンポジウム（2015年5月　国立釜山国楽院会議室）

○　2015年５月３日
韓日伝統芸術交流音楽祭

（国立釜山国楽院）

　2014年に企画されていた同イベントが「朝鮮通信使祭」（釜山文化財団企画）の行事の一環として実現した。奇しくも日韓国交正常化50周年記念の年にあたり、意義深い事業となった。全奏協では全国から24名が参加、関東と関西地区で事前練習を行い、稲田康氏の指揮により本番に臨んだ。

・両国伝統音楽に関するシンポジウム
【日本側の講演】
「両国伝統音楽の相違点と類似点」釣谷真弓
「日本の邦楽界の今」田中隆文
「全奏協の成り立ちと韓日伝統音楽交流の始まり」藤本玲

ハングルによる翻訳文と資料を投影して、活発な質疑応答もおこなわれた。

・伝統楽器の体験ワークショップ
　類似した箏とカヤグム、三味線とヘグム、尺八とテグムの組み合わせで実施。一般来場者も含めて教え合い、体験することができた。

・交流演奏会
　プログラムは韓国民族音楽《カヤグム散調》《サムルノリ》、日本の古典《八千代獅子》と現代曲《子供のための組曲》、合同演奏《アリラン》《ソーラン節》と日韓の音楽が見事に融和して観客に強い印象を与えた。
（韓国の指揮はクォン・ソンテク氏）

大連アカシア祭ジャパンデイ（中国・大連市　2017年5月）

○　2017年5月21日・22日
中国・大連市との交流

　全奏協会員14名が参加
・５月21日「大連アカシア祭開幕式」および同レセプションにて公演。
・５月22日「大連アカシア祭」開幕式典にて演奏。
・５月22日「大連アカシア祭ジャパンデイ」「交流演奏会」（中日友好協会）にて演奏。

○　2017年12月13日
　　2019年11月28日
釜山日本人学校訪問

　2016年に徳島邦楽集団が訪韓した際に日本人学校を訪れ、子供たちに邦楽演奏を聴かせたいと申し入れ、受け入れられて２度の訪問が実現した。
　《春の海》《さくらさくら》日本の歌メドレーを演奏、箏・三味線・尺八を体験してもらった。生の演奏と本物の楽器に触れ、子供たちも先生方も大変興味をもち、取り組んでいた。

釜山市呉巨敦市長表敬訪問（2019年11月）

釜山日本人学校訪問（2019年11月）

オンライン活用の成果と展望

立花茂生（副理事長）

全奏協におけるオンラインの活用については、
大きく運営、広報、そして事業の３つがある。

・理事会におけるオンラインの活用(Skype、Zoom)

理事会では、全国に散在する理事との意志調整を行うため、発足当初からSkypeを用いた音声会議を実施してきた。これはオンライン会議を通じて全奏協の活動枠組みや内規の策定をおこなう、初めての試みだった。初期はIT技術に不慣れなメンバーもおり、使い方やIDパスワードの紛失等に悩まされた。しかし、森佳久山氏尽力により、全奏協のWebサイトが立ち上がり、NPO法人としての形を整えた。さらに、新型コロナの影響で、オンラインビデオ会議が注目される中、Zoomを導入し、月例のビデオ理事会を開催してきた。博多から仙台まで理事が分散している状況で、オンラインを通じた強力なコミュニケーションを確立できた。

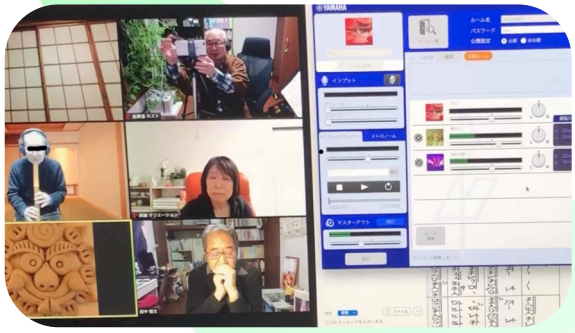
（2022年6月のオンライン総会　東京会場と地方の会員を結ぶPCの画面

オンライン総会（徳島会場　2020年6月）

・広報としてのオンライン活動(Web、Facebook)

新規会員の獲得、会員間のコミュニケーション促進、全奏協の情報発信において多種多様なオンラインツールを活用してきた。

発足以来WebサイトおよびFacebookを通じて全奏協のグループを運営しており、２０２３年８月現在で６２３名の会員が参加している。特にFacebookは利用年代層と全奏協理事の年代層が近いため効果的なツールとなっている。さらに、ユーチューブ全奏協チャンネルを開設し各事業の成果を配信をしたり、若年層の会員に向けてX（旧Twitter）やInstagram等も活用してきた。



オンライン合奏と視聴者

オンラインで使用される機器類

・事業としてのオンライン活動

対面での事業が制限されたコロナ禍において、オンラインでの事業展開に注力した。

（1）オンライン講習会

名曲「夕顔」講習会（藤本昭子先生、善養寺惠介先生　2021年）、水川寿也作品講習会(水川寿也先生　2022年)等では、講師宅からの配信を活用し、質疑応答を含む講習会をオンラインで実施した。オンライン講習会の利点は、全国の方が参加できるだけでなく、映像を通じて講師の手の動き等をわかりやすく伝えられることだ。

（2）オンライン座談会、交流会

外国人向けワールドオンラインディスカッション（2022年）、邦楽演奏とAI（2023年）等、特定の対象者や興味に基づいた座談会や、オンライン飲み会のようなイベントをZoomで開催した。ワールドオンラインディスカッションでは、国内だけでなく海外からの参加者もあり、邦楽の世界を広げる機会となった。

（3）オンライン合奏

第５回全国邦楽合奏フェスティバルin田辺（2022年　和歌山、国民文化祭）では、ヤマハSYNCROOMを活用したオンライン合奏の実証実験を行った。通常、邦楽合奏フェスティバルは地域のグループが対面で練習して成果を披露するが、オンライン合奏では高知・東京・千葉・神奈川・和歌山のメンバーがオンラインで練習し、フェスティバルで初めて対面して成果を披露した。オンライン合奏が有効であることを示す実証となった。

オンライン講習「雪舞」の収録　写真左から関野由美子（本会理事）　大畠菜穂子　水川寿也の各氏（2022年12月　水川寿也先生宅スタジオ）

・オンラインの今後の展望

全奏協はオンライン講習会と座談会を通じて、全国の邦楽者をつなぐ仕組みを今後も積極的に推進したい。特に地方の会員にとって、著名実演家や作曲家から低コストで講義を受けられるのは大きなメリットになる。

さらに、オンライン合奏については海外公演の準備としての活用を検討している。全奏協として海外公演の際の大きな課題の１つは全員が一箇所に集まってアンサンブル練習をするのが難しいことだ。これを解決するために、全国に数か所のオンライン合奏拠点を設立して、練習回数を増やすことで演奏の完成度を高めることを検討中だ。これにより、より多くの人々に邦楽のすばらしさを広め、国際的な舞台での活動が実現できることを期待している。

千葉会場でのSYNCROOMを使ってのオンライン合奏の事例　千葉、東京、神奈川、和歌山、高知でもリアルタイムでオンライン合奏をおこなっている

担当者の声

事務局担当　石井恭子

2011年7月の設立総会（於大阪）を開催、同年11月に所轄庁の認証を取得後、正式にNPO法人として活動を開始しましたが、事務局として組織・団体に関わる基本的知識ノウハウや運営知識に乏しく苦労は尽きませんでした。この点、森佳久山氏には陰に陽にお世話いただき何とか乗り切ることが出来ました。

また、2013年2月東京都三鷹市で主催した「第2回全国邦楽合奏フェスティバル」は、二日間で延べ約1300名が集った一大イベントとなりました。実行委員長として立花茂生氏が持つその経験・ノウハウを存分に発揮され無事成功を収めることができました。

今となっては懐かしい思い出ですがその当時としては、運営方法も手探りで何をするにも苦労したものです。

様々な思い出が去来する中で、携わることができて幸いだったことの一つに次のことがあります。全奏協は演奏会のみならず、講習会や交流会等にも力を入れ実施してきましたが、その中で全国から参加された多くの皆さまと出会いを得たことです。貴重な時間を共有できたことは実に有意義でした。

最後に全奏協は無事10余年迎えたわけですが、力不足の私を何かと支えてくださった会員、理事、事務局の方々を始め多くの皆さま方にこの場をお借りし心より御礼申し上げます。

受付をする事務局の石井恭子氏（左）と平岡香織氏（第5回全国邦楽合奏フェスティバル　18年9月　神奈川県川崎市）

全国邦楽合奏協会邦楽コンクール担当　　麻植武志

2012年7月に第一回シニア邦楽コンクールとして産声を上げた邦楽コンクールです。コロナ禍を挟んで2023年8月に九回目のコンクールを開催しましたが、よく九回目まで続けられたものだと思っています。

実施に当たっては、コンクールの信頼性、公平性を確保することに腐心しました。多くの演奏家が参加しやすい形式は何か、審査をどなたに依頼するのか、評価ポイントはどうするかなど、会場の確保から資金の調達まで課題山積の中、手続きや連絡のミス、また運営上の失敗などもありましたが、途切れることなく続けてこられたことが一番の喜びです。この10年間で全奏協ならではのコンクールのあり方が一定程度確立できたと感じています。

今までのコンクールにご参加くださった皆さん、審査にご尽力いただきました審査員の先生方、そして理事の皆さんご協力ありがとうございます。感謝申し上げます。

第2回全国邦楽合奏フェスの司会をする麻植武志常務理事（左）と英崇夫理事＝海外交流担当（14年2月 東京都三鷹市）

第７回全奏協邦楽コンクール記念写真（17年8月　大阪市）

会報誌「全奏協通信」担当　　高橋哲也

最初は全奏協通信も紙媒体として発足しました。金銭も、スタッフも、ないないづくしの全奏協でした。当初は編集も少しハードルの高いアプリケーションソフトウェアの力を借りて安価に制作できるように心がけました。

その後、印刷会社の技術もさらに向上し入稿に誰でも編集可能なWordやPowerPointが使えるようになり、そのうえ紙媒体であってもQRコードで音や動画ともリンクできるようになりました。このようなICT（情報通信技術）の発展が機関誌作成に貢献したことは否めません。

翻って、そもそも「機関誌」の役割とは何なのでしょうか。ものの本によれば「建設中の建物の回りに組まれる足場」とも「その機関の目的を達成するための手段」の一つだとも言われています。

では、全奏協の目的とは。それは、ホームページに掲載されている発足当時の理事長のコメントに端的にまとめられています。

第一は邦楽の楽しさを、邦楽合奏という演奏スタイルを通して次世代につなげること。第二は世界に誇るべき日本の伝統文化、邦楽を次の世代に確実にバトンタッチすること。第三に邦楽を通じて広く社会に貢献すること。そして最後に邦楽関係の情報を共有することで会員相互をつなぐことです。

では、具体的には何をどのようになすべきか、また、社会が何を全奏協に求めているのか。編者は、発足当初の目的にそって、全奏協通信を作成してきました。そして、それは理事長を先頭に機関誌係の立場で走りながら考える10年でもありました。

次の10年においても全奏協の設立当時の目標を忘れず、読みやすい記事を心がけ、取材に執筆に動き回り、その上で、子や孫の世代といっしょに邦楽合奏を楽しめれば望外の喜びなのかもしれません。そういう思いの今日このごろです。

第５回全国邦楽合奏で、受付係をする高橋哲也理事（左）と佐藤法子理事（18年9月　川崎市洗足学園音楽大学）

Photo Gallery

12阿南

12阿南

韓国国楽雑誌記者
12阿南

宇宙箏
12阿南

12阿南
高橋久美子

12阿南

田中隆文
古屋輝夫
稲田康
山本観山
藤本玲
沢井一恵
野坂操壽
12阿南

前田智子
12阿南

14三鷹

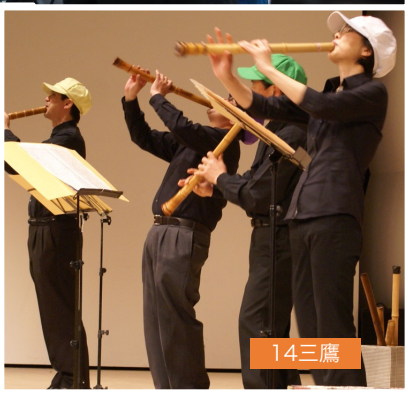
15釜山
オウルリム

稲田康

16大連

14三鷹

14三鷹


14三鷹

14三鷹

14三鷹

15金沢
星田一山

15金沢

人間国宝
今藤政太郎
15金沢

人間国宝
富山清琴
人間国宝
今藤政太郎
藤原道山
15金沢

人間国宝
富山清琴
15金沢

15金沢

15金沢

16徳島
全国邦楽合奏フェスティバルin徳

16徳島

16徳島

16徳島
藤本　玲
立花淑生
山上明山
内田道子

16徳島

16徳島

16徳島

全国邦楽合奏フェスティバ
16徳島
阿波木偶箱まわし

16徳島

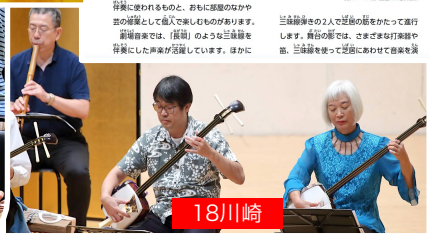
18川崎

16徳島

18川崎
星田一山

18川崎
AKARA

十八届大连赏槐会暨东北亚国际旅游文化周
alian Acacia Flower Festival & Northeast Asia International Tourism Culture Week
开幕式
Opening Ceremony
17大連



12阿南	―第１回全国邦楽合奏フェスティバル（12年9月徳島県阿南市＝国文祭）
14三鷹	―第２回全国邦楽合奏フェスティバル（14年2月東京都三鷹市）
15金沢	―第３回全国邦楽合奏フェスティバル（15年7月石川県金沢市）
15釜山	―日韓国交正常化50周年「韓日伝統芸術交流音楽祭」（15年5月韓国・釜山市）
16大連	―大連演奏交流会（在瀋陽日本総領事館大連事務所招聘（16年3月中国・大連市）
16徳島	―第４回全国邦楽合奏フェスティバル（16年12月徳島県徳島市及び神山町）
17大連	―日中国交正常化45周年記念「大連アカシア祭 ジャパンデイ」（17年5月中国・大連市）
17寝屋川	―第６回全国邦楽合奏協会邦楽コンクール（17年8月大阪府寝屋川市）
18川崎	―第５回全国邦楽合奏フェスティバル（18年9月神奈川県川崎市）
19東京	―日本の伝統文化仕事図鑑（金の星社）制作協力（19年4月東京都）
21全国	―Zoomによるリモート講習会「夕顔」 ＝講師：藤本昭子、善養寺恵介（21年7・9月全国）
21田辺	―第６回全国邦楽合奏フェスティバル（21年11月和歌山県田辺市＝国文祭）
22全国	―Zoomによる水川寿也作品リモート講習会＝講師：水川寿也（22年11月12月）

(記事中、氏名等の敬称は省略します)

「和楽器アンサンブルを楽しむ講習会・交流会」での記念
写真　19年8月　神奈川県川崎市（洗足学園音楽大学）

役　員　名（2024年４月１日　現在）

【役員】

理 事 長　藤本　　玲
副理事長・東日本本部長　立花　茂生
常務理事　山本観山
常務理事・西日本本部長　麻植　武志
理　　事　英　　崇夫
理　　事　内田　道子
理　　事　名村　茂代
理　　事　釣谷　真弓
理　　事　佐藤　法子
理　　事　高橋　哲也
理　　事　関野由美子
理　　事　中川　雅玲
監　　事　宮本　晴義
相 談 役　森　佳久山
相 談 役　田中　隆文

役員略歴
（全奏協ホームページ）

【顧問】

石川憲弘（現代邦楽合奏指揮者・箏曲家）
稲田　康（オーケストラアジア指揮者）
黒河内茂（日本伝統音楽振興会代表）
坂田誠山（邦楽創造集団オーラＪ代表）
高橋明邦（現代邦楽指導者・指揮者）
西川啓光（邦楽打楽器奏者）
藤本　草（（公財）日本伝統文化振興財団顧問）
三塚幸彦（箏尺八ギターによる「遠TONE音」代表・尺八担当）
尾﨑太一（日本音楽集団代表）
松尾祐孝（作曲家）

【本部事務局】

石井　恭子　　山本　真佐子
平岡　香織　　山上　朋代（会計）

特定非営利活動法人
全国邦楽合奏協会「10年のあゆみ」

初版発行日　2024年３月31日
第２版発行日　2024年11月15日
発行所　特定非営利活動法人 全国邦楽合奏協会
所在地　徳島県徳島市中洲町1丁目50番地の2
電　話　TEL 088-661-7621
E-mail　info@zensokyo.org
発行人　理事長　藤本　玲
編集委員　釣谷真弓　中川雅玲
中川　基　高橋哲也

特定非営利活動法人
全国邦楽合奏協会
https://www.zensokyo.org